

南米日系人のコンパラブルな語りにおける言語・非言語使用特性

松田 真希子(金沢大学)

1. はじめに

地球規模の移動の世紀においては、言語文化の汽水域領域、すなわち異言語異文化間接触、あるいは複言語使用者間接触の領域が拡大している。そこではダイナミックで言語混合的な相互行為が行われており、そうした現象の研究の代表的なものに Translanguaging (García & Wei, 2014), Metrolingualism (Pennycook & Otsuji, 2015)がある。

日本語においても、こうした汽水域における言語コミュニケーションの研究が行われている。日本国内においては山下(2016)が在日パキスタン人児童のコードスイッチング(CS)¹とスタイルシフト(SS)の状況について、エスノグラフィー的な質的研究を行っている。調査の結果、子どもたちは英語、ウルドゥー語、接触日本語変種、パラ言語、スタイルなどを縦横無尽に使用していることを報告している。また、佐藤(2018)は日本の外国人受け入れ校に在籍する複言語話者の言語意識・言語使用を調査し、複数言語話者には生活言語と学校言語 (Cummins, 2000) の使い分けを求める学校や地域社会の「期待」のもとで、あえてそれから逸脱することで練り広げられる CS (戦略的 CS) が見られることを指摘している。

筆者は近年 JHL (Japanese as a Heritage Language) としての日本語使用者の研究を行っている。特に日本語使用者がマイノリティでありながら何世代にもわたり日本語を継承している南米地域の日系人を対象としている。彼らの複言語使用状況から、日本語研究および日本語教育研究の示唆を得ることができるのではないかと考えているためである。松田(2018)は南米の継承言語話者の日本語の口頭能力を分析し、JHL の日本語使用者は JFL の日本語超級話者と比べ、関係性に応じた日本語使用のバリエーションに優れていること、特に親密な関係性を形成する日本語力に優れていることを示した。更に松田(2019)では南米の継承言語話者の日本語使用における方言使用能力から、JFL との差は、家庭内・コミュニティ内での相互行為の中で獲得された「私のことば」の力の差、「主体的な言語使用」の意識の異なりにあることを示した。しかし、松田(2018, 2019)は JFL と JHL の差の検討を中心に行っており、JHL の複言語の使用の差異や CS, SS についての検討は行っていない。

そこで、本研究では、南米の継承日本語話者が複数の言語レパートリーを持つ者同士で、同じ内容の出来事語りを複数言語で行った場合 (=コンパラブルな語り²)、どのような傾向の異なりが見られるかについて調査した結果を述べる。これはある種実験的な試みであり、現実には同一の内容を同時に複数の言語で同じ相手に話すことはない。しかし、実際に行ってみた結果、ある種の不自然な状況であっても特徴的な傾向が言語面・非言語面 (パラ言語面含め) に見られた。

2. 調査概要

2.1 調査対象地

調査対象地を図1に示す。パラグアイ・シウダー・デル・エステ(Ciudad del Este, 以下エステ)はパラグアイ第二の都市でブラジル、アルゼンチンと国境を接し、世界遺産イグアスの滝にも隣接している。ブラジル側の町フォス・ド・イグアスには橋を渡って容易に移動できるため、市内ではポルトガル語が広く用いられている。

また、国境地帯であるだけでなく南米外からの移住者が多く、台湾等のアジア系移民、レバノン・シリア等のアラブ系移民も多く住んでいる。日系人はエステでは少数派であり数十家族が小売業等で居住している。しかし 30 キロ先に日本語使用者の多い日系移住地イグアスがあるため、エステにはイグアス移住地出身者も多く、日本語能力の高い日系人が多い。この地域に住む日系人はスペイン語、ポルトガル語、現地語のグアラニー語の3言語を日常的に使用している。更に世界的観光地であるため英語も使用可能な日系人がいる。

ボリビア・サンフアン地区はボリビアの日系人が 700 名ほど居住する戦後移住地であり、農業組合が中心になり



図1 調査対象地

¹ 本発表では CS を一つの発話の中での複数の言語の混在だけでなく状況や場面に応じた言語の使い分けと広くとらえて使用する。

² コンパラブルとはコーパス研究で用いられる術語で wikipedia のような同一内容に関してそれぞれの言語で表されたものを意味する。

営農が行われている。ボリビア人を雇って大規模農業を展開する富裕層の日系人が多い。日本人はマイノリティではあるが、社会的地位が高く、コミュニティの結束も強く、日本語・日本文化の継承が盛んである。サンフアンは西日本出身者（長崎県）が約 5 割を占め、使用される日本語には西日本方言の影響が強くみられる。2 世同士の会話ではスペイン語と日本語の *mixing* が起こっており、ロング (2019) は混合言語の存在の可能性を示唆している。

2.2 インフォーマント情報

今回分析対象としたインフォーマントはパラグアイのエステ在住の日系人 3 名 (S1~S3)、ボリビアのサンフアン在住の日系人 2 名 (S4~S5)、計 5 名である (表 1)。S1~S5 は全てスペイン語と日本語の加算的バイリンガルであるが、エステ地区の家庭内言語はスペイン語であり、サンフアン地区の家庭内言語は日本語とスペイン語である。

表 1: インフォーマントの概要

	年齢	日系	居住地	使用可能言語 (左が第一言語)	発話順	語りの内容
S1	20代	3世	エステ	スペイン語, ポルトガル語, グアラニー語, 日本語	JP → ESP → POR	ブラジルに旅行に行った時「ハム」のポルトガル語を間違えた
S2	20代	3世	エステ	スペイン語, ポルトガル語, グアラニー語, 日本語, 英語	ESP → JP → POR → EN	自宅の大型犬の足を車でひいてしまって病院に連れて行った
S3	40代	2世	エステ	スペイン語, 日本語, ポルトガル語, グアラニー語	JP → ESP	ポルトガル語とスペイン語で意味が違うことでいくつか失敗した
S4	40代	2世	サンフアン	日本語, スペイン語, 英語	JP → ESP	飲み会で朝 3 時に家に帰ったので家に鍵がかかっている入れなかった
S5	40代	2世	サンフアン	日本語, スペイン語	JP → ESP	結婚前夫の羊が自分の家に来た時, 父親が羊と娘を交換したいと言った

2.3 データ収集及び分析方法

今回の語りは、定延利之氏「ちょっとおもしろい話」³のフォーマットに基づき、インフォーマント自身のおもしろい体験談を複数言語で語ってもらった。話し手は、同一の内容を同じメンバーに日本語→スペイン語 (→ポルトガル語→英語) の順で語った (S2 のみスペイン語が先)。その場にいた調査者は全員ある程度それらの言語が理解できるが、調査者 1 (筆者, Listner1, 以下 L1) の第一言語は日本語, 調査者 2 (日系ブラジル 2 世, L2) の第一言語はポルトガル語, 調査者 3 (日本在住アメリカ国籍, L3) は第一言語が英語であった。S1-S5 の会話場面の位置関係を図 2 に示す。

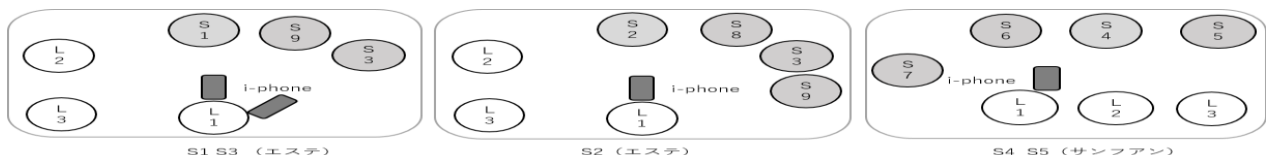


図 2 : 会話参加者の状況

話を依頼するときは、調査者がインフォーマントに話してもらいたい言語で依頼した。録画は *i-phone* で行った。1 言語あたりの語りは 1 分~5 分程度である。データ収集後、録画データをもとに、質的・量的な分析を行った。質的には動画をもとに発話内容、談話展開、パラ言語、非言語行動などを分析した。量的には主として非言語面の行動について談話分析ツール ELAN を使用してアノテーションし計量的に分析を行った。

3. 結果・考察

3.1 コードスイッチングと” we-code”, ” they-code”

言語を指定したこともあり、表面的には当該言語の語りの間は別言語への CS は起こらなかったが、詳しくみると第一言語の言語・非言語特性が第二言語、第三言語の語りに影響していた。第二、第三言語において部分的に第一言語への CS が起こることもあった。例えば、適切な表現が浮かばなくなった際、周囲の S に支援を要請するとき CS が起こって

³ <http://www.speech-data.jp/chotto/>

いた。そして自分自身の発話行為の内省やモニタリング時にも[1]の“no”のようなCSが起こっていた。

[1]ハムが見つからなかったんですね no.チズチーズ (S1) ※下線は筆者

S2のスペイン語での語りでは、怪我をした犬を連れて行った現地ペットショップの名前やその店員の様子などが説明されていたが、L1-L3に向けられた日本語やポルトガル語での語りでは内容がカットされていた。相手との心理的距離を小さくする変種を“we-code”,大きくする変種を“they-code”と呼ぶが(Gumpers, 1982), 話の骨子は同じでもメインの聞き手との共有知識から他の聞き手にわからない地元の内容をスペイン語で話すことは調査者にとって内容面での“they-code”であった。また、言語使用による心理的距離の変化も見られた。例えばS1はL2(ブラジル人)にポルトガル語で体験を語る時が最も情報量が多く、動きが活性化した。言語順が最後であったというだけでなく、第一言語ではないポルトガル語でもジェスチャーが最も激しく機敏になった。それはL2がブラジル人であり、このブラジルでの失敗を最もよく理解できると思ったからだろうか。出来事再生も外国語(ポルトガル語)を混ぜる必要もない。そしてS1の視線は発話終了までL2しか見なかった。この時L2とS1には“we-code”ができていたと言えよう。

3.2 言語特性・パラ言語・非言語特性

日本語面についていえば、日本語母語話者と類似した言語特性や、スペイン語の談話構造の転移とみられる現象が確認された。例えば談話終結部において、日本語母語話者は「～という話です」といって終わる傾向があることが報告されているが(三枝2018), 本調査でも、日本語語りで終結部にまとめの発話を行った話者がみられた([2][3])。これらの終結部の表示は、スペイン語やポルトガル語においては、手を上にあげる(S4), 右手で払う(S1), 両手を聞き手に見せる(S1)等のジェスチャーによって示す話者が大半であった。あるいは複合的に“eso es (That's it.)”と身振りつきで終結を示す話者(S3), 日本語の終結部で手を挙げる話者もいた(S4)。こうした終結部の多様性は言語の混合状況が見える。

[2]それを、もう、ちょえーと、あのホテル戻ったときみんなにいったらわら笑い始めました。でーそういう一ことがあったんですね一回 (S1)

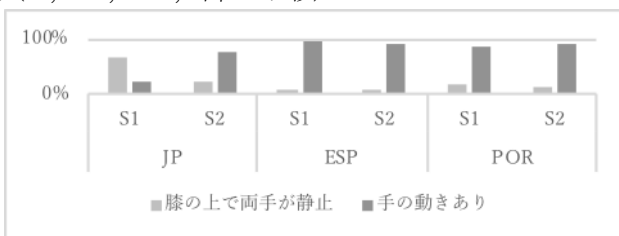
[3]という失敗が**いっぱい**ありました。ということ。はい。 (S3)

パラ言語的特性、非言語特性は日本語とスペイン語&ポルトガル語で異なる傾向が見られた。パラ言語特性としては、スペイン語やポルトガル語を話す時は、韻を踏んだリズムのある発話、スピードの緩急などが見られた。日本語では、相対的に間延びした発話になっていた。非流暢になった際も、語頭戻りだけでなく、[2]のような延伸続行(定延2018)が見られた。こうした延伸続行はスペイン語JFL学習者には見られにくいためJHL話者の日本語特性の可能性がある。

非言語特性については、特に手の動きが大きく異なった。3言語による手の動きの時間差(S1,S2)を表2, 図3に示す。S2のように個人差もあるが、日本語の語りの際、膝の上に両手を置く、或いは手の動きが静止するケースが多くインフォーマントにみられた。質的に見ると、スペイン語やポルトガル語の語りになると、手の動きが活性化し、利き手である右手が常に動いており動きも素早かった。日本語の手の動きは内容の補完、内容のまとまりの可視化のために用いられているのに対し、スペイン語は内容の補完等に加えて、リズムの整備や可視化の目的に用いられているように見えた。

表2/図3 手の動きの言語差 (JP, ESP, POR, 単位ミリ秒)

		発話時間	膝の上で両手が静止	手の動きあり		
JP	S1	127435	85050	67%	29837	23%
	S2	170000	41000	24%	129000	76%
ESP	S1	86176	6275	7%	79901	93%
	S2	226210	20000	9%	206210	91%
POR	S1	104219	15928	15%	88291	85%
	S2	161000	18000	11%	143000	89%



3.4 話し手による聞き手の指定行動

語りの言語を切り替える際、中心となる聞き手を変えようとするインフォーマントが多くみられた。具体的には(1)第一言語で語る時は親しい関係にある同一の第一言語話者を主な聞き手として指定して話し、(2)第二、第三言語で語る時は、その言語を母語あるいは主言語として話す人間を主な聞き手として指定して話していた。

(1) のケースにおいては、S が L1-L3 に向かって話すことはほぼなく、別の親しい数名の S に向かって話していたことがあげられる。特に S2 の語りは姉の S8 と体験した出来事であったため、S8 と内容を補完しあいながら同じ地区の S9 に向かって語っていた。その際、S2 にとって L1-L3 は完全に視界から消え去っていた。S1-S3 にとってスペイン語での語りは“we-code”であり、日本語や他の言語での語りは“they-code”であった。そのためスペイン語での体験の共有は身内に向けられ、日本語での体験の共有は他者である調査者に向けられて語られる傾向にあった。

(2) のケースは、例えば次のようなものである。

[4] (日本語の語りを終えた後で)

L3: 今の話スペイン語で

S4: ちょっと待って... (ビールを飲む) (全員笑い)

S7: そういわれるとなかなか難しい

S4: (S6 に) 聞いてなかったよね、今の話 (S6: ああ聞いてない) ←聞き手指定行為

S4: ボリビア人の顔にしな。S7 (名前)。そしたらボリ、スペイン語で話す。ガハハ ←聞き手指定行為

L2: me por favor, hablas en español, porque entiendo español [スペイン語で話してください、わかります]

S4: no, hace un tiempo atrás...[いや、この前...]

ここでは S6 をもう一度話すべき聞き手として指定しようとしている。そしてその隣の S7 には「ボリビア人の顔にしな」と要求している。同じ話を二回することは不自然で、スペイン語だけでの語りは通常の関係の中で不自然であるため S4 は整合性を持たせるために戦略的に聞き手を指定しようとしていたと思われる。L2 がスペイン語でリクエストすると、L2 に向かってスペイン語で語った。サンフアン地区の話者 S4 にとって、スペイン語だけでの語りは現地の人とのコミュニケーションで利用する“they-code”である。そのため日系人仲間ではなくよそ者の調査者に語ったと思われる。

4. まとめ

本研究では JHL としての複言語話者同士で同一内容の語りを複言語で行った際の差異について検討を行った。そこでは場を共有しつつもその語りの聞き手として最もふさわしい人間を選択しようとする行為や、相手との関係性に応じた内容調整や言語・非言語面での調整が見られた。筆者は、人間は場や相手との関係に応じてコミュニケーションのあり方、キャラのあり方を変える分人(平野,2012)の集合体であるという立場をとるが、JHL の同一空間・同一内容の異言語語りは分人の現れに見えた。日本語コミュニケーションにおいて、相手に応じて日本語を使い分けキャラやスタイルを変えるように JHL は相手に応じて言語を含め様々な調整行動を行い、境界線をダイナミックに引いている。こうしたコンパラブルな語りを分析することでそのダイナミズムの一端を分析できるのではないだろうか。

謝辞 本研究は JSPS 科研費[16H05676]の助成を受けたものである。執筆にあたり大江元貴先生から貴重な助言をいただいた。本調査にあたりエステ地区、サンフアン地区から多大な協力を得た。ここに謝意を表する。

参考文献

佐藤 美奈子(2018). 多数言語話者高校生 of 言語認識と「戦略的 CS」—「場」の期待と逸脱— 社会言語科学会大会予稿集, 42, 25-28.

三枝令子(2018). 「わたしのちょっと面白い話」から見た話し始めと話し終わり. 定延利之 限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究. 330-339.

松田真希子(2018). ふさわしさの文法-日本語複言語話者の日本語使用から見えること-. 2018 年度日本語文法学会予稿集

松田真希子(2019). 「生きたことば」の主體的使い手としてのプロフィシエンシー 第 1 回国際日本語プロフィシエンシー研究シンポジウム予稿集(PDF)

ロング・ダニエル(2019). ボリビア, パラグアイ日系調査から得られた知見—複言語状況と混合言語に注目して—. EJHIB2019 Proceeding (PDF)

山下里香(2016). 在日パキスタン人児童の多言語使用 コードスイッチングとスタイルシフトの研究 ひつじ書房

平野啓一郎 (2012) 私とは何か—「個人」から「分人」へ— 講談社現代新書

García, O., & Wei, L. (2014). *Translanguaging. Language, Bilingualism and Education*. London, England: Palgrave Macmillan.

Pennycook, A., & Otsuji, E. (2010). *Metrolingualism Language in the City*. Routledge

Gumperz, J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge University Press.